

探訪 北の風景 20

まちなか再生で 市民と観光客が回遊

富良野市

萩本和之



熱い人たちが知恵と実行力を結集して、魅力的なまちに蘇生。観光地として有名な富良野市も、中心市街地商店街の衰退が進んでいたが、「ピンチをチャンスに」と民間主導の再開発に取り組んだ。観光客向けの食文化発信施設を造るとともに、高齢者施設や保育所などを集約して建設。出来上がったコンパクトシティーには大勢の市民や観光客が集い、「回遊」。人の波は広がり、子供の歓声が響き、地価も上昇。新たなまちの顔になった。

まちの中に巨大な空き地が生まれたことと、まちづくり3法（都市計画法、大規模小売店舗立地法、中心市街地活性化法）が2006年に抜本的に改正されたことがきっかけ。1998年制定の「3法」は官主導の再開発が軸だったが、改正後は「民活」を主体に利便性と機能性を集積させたコンパクトなまちを目指すことになった。ちょうどその時、市の中心部にあり、国道38号線沿いでもある富良野協会の病院が移転することになった。1日千人が通う病院がなくなり、約6600平方メートルの巨大空き地が出現。周辺商店街の衰退に危機感をもったのは「まちづくり熱血おじさん」の仲間たち。メインメンバーは「熱血おじさん」の湯浅篤（パソコン・ネット会社社長）や西本伸顕（青果会社社長）、荒木毅（建設会社社長、商工会議所会頭）の3氏。

西本さんらは身銭を切って奔走し、市や商工会議所などを巻き込み、新たな法定協議会を設立。中心市街地活性化基本計画「ルーバン・フラン（ちよつとおしゃれな田舎まち）構想」を作成して、国に申請。さらに実行部隊としての「ふらのまちづくり会社」を8千万円以上に増資。荒木氏が会長、西本氏が社長、湯浅氏が専務に就いた。斬新な構想だったので、国は難色を示したものの、08年認定にこぎ着けた。

構想は①まち中のにぎわい回復としての拠点「フランマルシェ事業」②三世代が交流でき、みんなに優しい中心市街地を目指し、再開発を含めた「ネーブルタウン（へそのまち）事業」が二本柱。第一弾のマルシェは10年に協会病院跡地に「食と農の魅力を発信する『まちの縁側』」を理念として3棟の平屋建ての建物と、市民と観光客らが交流する狙いの屋外広場を設けた。お土産コーナーに並べた2千点以上の商品は、ほとんどが地元生産。施設内の飲食店7店もそれぞれ工夫を重ねた食べ物を提供し、有名なのは長さ33センチの揚げギョーザ「なまら棒」。観光シーズンには長蛇の列で、購入を断念する人が続出するという。開業5年間で延べ361万人以上が来場。14年度の売上高は約6億円弱、という予想以上の大成功を収めている。

第二弾のネーブルタウンづくりは13年から「東4条街区再開発事業」として取り組んだ。複合商業施設「マルシェ2」（全天候型多目的交流空間）や市立保育所、賃貸マンションも併設）を中核施設として「商業にぎわいゾーン」と「医療福祉ゾーン」を形成するもので、本年6月20日に完成した。マルシェ隣りの「マルシェ2」横は段差のない歩道で、向かいには真新しい商店が並び、裏側には介護付き高齢者住宅や診療所、薬局などが集約された。



地元農家が持ち込み、自主管理されているマルシェ2農産物コーナー



市民と観光客が“回遊”するコンパクトな町並み。手前は国道沿いのマルシェ、右上に賃貸マンションなど併設の7階建てマルシェ2（富良野市提供）



マルシェ2の開放的な交流空間「タマリバ」。再開発された東5条通の商店街が窓から見える

低農薬野菜などを置き、ネット以自己管理をするスペースや、東京などから移住して起業した人のフードコーナーなども。特に、交流空間「タマリバ」には9面のマルチビジョンを完備。日本ハムの試合中継や音楽会、ハロウィーンの集合場所などイベント広場としても活用されている。

この成功の陰に行政の枠を超え、支えてきた市職員たちがいる。市農業委員会の大玉英史事務局長や上下水道課の吉田育夫課長、さらに今も中心街整備推進課で活躍している黒崎幸裕課長らだ。ヒントを得たい方は西本社長著の「フラノマルシェの奇跡」をお読みいただきたい。

ハはきもと かずゆき・大学非常勤講師▽